

幼稚園児の家族構成、育児と発達の関係

吉田敬子(九大・小児科)
松尾誠(")
黒川徹(")

目 的

家族構成や育児環境と乳幼児期の発達の関係を調べる。

対 象

昭和58年4月小学校入学予定の久山町幼稚園児105名(男児61名,女児44名)である。対象の園児は出生時より当科が定期的に集団健診時に発達を観察しており,また家族構成,育児状況なども記入しているため,そのデータより諸因子を分析した。

結 果

久山町の家族は平均同居人数が5.2±1.6人で祖父母の同居率は43%であった。昼間の主な保育者は母89例,祖母8例,託児所3例その他2例であった。

乳幼児期の平均発達指数は1才;1才6カ月,3才時の集団健診時に保健婦が遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表に記入したものを発達指数に換算して求めた。6領域にわたり久山町の園児の平均発達は正常範囲である。(図1)

就学前健診の成績は河井の言語発達診断検査を用い,語い指数は105±18,発音10点中9.7±0.6点,ITPAによることばの理解(標準値36)は35.3±4.7であった。

祖父母の同居の有無と1才時の発達指数は,基本的な生活習慣をはじめ同居群と非同居群では差がなかった。(表1)

昼間の主な保育者と歩行開始については,母の群が11.6カ月,祖母の群が11.9カ月と差がなかった。

歩行開始及び発語と性差については,歩行開始が平均11.9±1.6カ月,発語が平均,11.7±2.9カ月で両者とも男女差はなかった。

発語と歩行開始については,発語が1標準偏差

以上早い6~9カ月群と遅い14カ月以降の群の歩行開始は前者が11.0カ月,後者が12.7カ月で5%以下の危険率で相関を示した。つまり発語が早いほど歩行開始も早い結果が得られた。(表2)

発語と同胞順位については,発語の早い群が兄や姉のいる傾向がでたが有意差はなかった。

昼間の主な保育者と基本的な生活習慣の発達については,1才時は母の群が,1才6カ月時は祖母の群の発達が良好だったが,3才時は託児所群が追いついた。(表3)

昼間の主な保育者と対人関係の発達については,各年令とも祖母の群が,もっとも良好で託児所群が低い傾向がでたが有意差はなかった。(表4)

同胞数と3才児の発達については,移動運動以外の領域は,すべて1人っ子が最良だが各群に有意差はなかった。(表5)

家族構成人数と就学前に検査した語い指数については,3人以下の小家族の語い指数が平均105,9人以上の大家族が101であり,家族の人数が少ない方が語い指数は高かったが有意差はなかった。(表6)

昼間の主な保育者と語い指数は母の群が105,祖母の群が100,託児所群が94となったが有意差はなかった。(表7)

発語と就学前に検査したことばの理解については,発語が6~9カ月であった群は37.2,14カ月以降の群は36.3で有意差はなかった。

考 察

久山地域の一年令での家族構成,育児と発達の関係について諸因子分析を試みたが正常発達群においては有意差のある因子はなかった。しかしsocio-economicalな因子,親子関係などさらに一歩進んで調べる必要があると思われる。また幼児期のことばの遅れの頻度は数%といわれるが今回105名中に該当者はなく,さらに対象の

数をより多くとる必要もあると思われた。Rutter は家族構成員の大きさと年長の幼児の語りテストが言語性IQは関連が強く多人数の家族の子どもほど言語の発達は悪いと述べている。本研究も家族構成人数が小さい方が語り指数が高い、また同胞数と3才児の発達についても1人っ子が良好であったが、いずれも有意差はなかった。また

発語や歩行開始と同胞数や育児環境の関連は見出し得なかった。しかし発語と歩行開始間には関連がみられた。これはある程度乳児期の発達が生物学的な発達の個人差によることを示しているのかもしれない。久山町は育児環境が類似し調査に適していると思われる。今後、対象数をより多くとり諸因子を分析していきたい。

表 1 祖父母の同居の有無と1才時の発達指数

	全体 (N=85)	有 (N=36)	無 (N=46)
移動運動	105	104	105
基本的生活習慣	109	110	109
発 語	105	106	106
言語理解	105	107	103

表 2 発語と歩行開始

発語	歩行開始 ★
6カ月～9カ月 (N=12)	11.0 ±1.0 カ月
14カ月～ (N=10)	12.7 ±2.0

★ P < 0.05

表 3 昼間の主な保育者と基本的生活習慣の発達指数

	1才	1才6カ月	3才
全体	109 (N=85)	118 (N=85)	110 (N=102)
母	110 (N=71)	112 (N=71)	110 (N= 87)
祖母	100 (N= 8)	118 (N= 8)	104 (N= 8)
託児所	100 (N= 2)	108 (N= 2)	114 (N= 3)

表 4 屋間の主な保育者と対人関係の発達指数

	1才	1才6カ月	3才
全体	103	104	110
母	102	98	110
祖母	106	109	111
託児所	95	88	106

表 5 同胞数と3才時の発達指数

	1人 (N=9)	2~3人 (N=90)	4人~ (N=3)	全体 (N=102)
移動運動	107	110	100	110
手の運動	109	108	100	108
基本的な生活習慣	115	109	112	110
対人関係	110	110	109	110
発語	112	110	112	111
言語理解	109	107	94	107

表 6 家族構成人数と語い指数

全体	105 ± 18 (N=105)
3人以下	105 ± 20 (N= 7)
9人以上	101 ± 17 (N= 12)

表 7 屋間の主な保育者と語い指数

全体	105 ± 18 (N=105)
母	105 ± 18 (N= 89)
祖母	100 ± 18 (N= 8)
託児所	94 ± 8 (N= 3)



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



考察

久山地域の一年令での家族構成, 育児と発達の関係について諸因子分析を試みたが正常発達群においては有意差のある因子はなかった。しかし socio-economical な因子, 親子関係などさらに一步進んで調べる必要があると思われる。また幼児期のことばの遅れの頻度は数%といわれるが今回 105 名中に該当者はなく, さらに対象の数をより多くとる必要もあると思われた。Rutter は家族構成員の大きさと年長の幼児の語いテストが言語性 IQ は関連が強く多人数の家族の子どもほど言語の発達は悪いと述べている。本研究も家族構成人数が小さい方が語い指数が高い, また同胞数と3才児の発達についても1人っ子が良好であったが, いずれも有意差はなかった。また発語や歩行開始と同胞数や育児環境の関連は見出し得なかった。しかし発語と歩行開始間には関連がみられた。これはある程度乳児期の発達が生物学的な発達の個人差によることを示しているのかもしれない。久山町は育児環境が類似し調査に適していると思われる。今後, 対象数をより多くとり諸因子を分析していきたい。